

大鏡の文藝性 序説

— その一 主題に就いて —

北西鶴太郎

一

大鏡の主題は何か、いふまでもなくそれは道長の栄華であり、また栄華の絶頂に達し得るに至つた起因と道程である。こゝまではすでに教科書的な常識になつてゐる。それならば、それは栄華の讚美か肯定か、それともまた否定なのか。

こゝで一応断定を停止し、性急な結論をさし控へ、改めて靜かに考慮をめぐらす必要がないであらうか。

大鏡は、これを歴史と観ようが文芸と観ようが乃至その総合と観ようが、主題はつねに問はるべきであり、事主題に関する限り、軽々しい論断は、慎しみたいと思ふ。

私は、かつて「大鏡の批判に就いて」(昭和九年、改造社、)
日本文学講座、第三卷) 小論において、有名な道長の法成寺建立の一條を引き、次のや
という事を書いた。

道長には天の恩寵があつて、「何事も行はせ給ふをりに、

いみじき大風吹き、長雨ふれども、まづ二三日かねて、空は
れ土乾くめり。」と、これは日和運の強い人間には今もある
事だからいゝとして、「かかれば、或は聖徳太子の生れ給へ
ると申し、或は弘法大師の佛法興隆の爲に生れ給へるとも申
すめり。」これも、栄華物語にほゞ同じ趣に書かれてゐるか
ら、或は当時そんな噂があつたかも知れない。すれば権者
(佛の化身)と評されてよからうも知れぬ。だから天下泰平
五穀成就、未曾有の黄金時代が今や眼前に出現してゐるのだ
といふ。これは果して正面的な礼讚の辞であらうか。一昔の如
く貴族の馬飼牛飼が御霊会(怨霊を和める)の費用だ、祭の掛
り物だと、錢、紙、米などをやかましく集めに廻り、農民ど
もを苦しめて野山の草木を刈らせないやうな事もなくなつた
」と云ふ。果してさうか。「今は卑しい召使も弁当持參で、
人の物を取つて食ふ事がなく、村長や年行事なんぞが火祭だ
何だとうるさく費用をせついた事も絶えた。」誠にその通り

か。「加茂川原に作つた豆、さよげ、瓜、茄子は、生産過剰で、馬牛も食まぬ。」とは実か。佛滅後五十六億七千万年人壽八万歳の彌勒菩薩の世は今こそ来たのだといふ。何と云ふ壯大な誇張であらう。過褒であらう。繁樹ならずとも黙過は出来まい。繁樹曰く、「それでもあなた、只今はこの法成寺の夫役を頻りに徵発すると、人は負担に堪へないやうに申しますが、さうはお聞きになりませんか。」例に依て言葉は和かであるが、世継の讚辭に断乎たる一轉語を下し得てゐる事は確かだ、さてもありがたい彌勒菩薩の世ではある。脆くも肯定した世継は、「二三日までに徵す」とその頻度まで具體化して来たが、更に「徵発されたついでにはありませんか、なぜといへば、法成寺といふ極樂淨土が新に出現する爲なのですから。力さへ堪へれば奉仕しないでなるものか、行末はこの御堂の草木に生れ代りたいと私なんぞは思つてゐるのです。だから物のわかつた人は、頼んでも参るべき筈です。」悲惨なる光栄を皮肉り得て妙ではないか。而も言葉は、飽くまで落ちつき、鋭鋒は深く讚辭の蔭に隠れてゐる。最後に於ける申文の一條に到つては、鋭鋒終に包むべき衣を失ひ、筆端正に紫電を放つ概がある。否、評者は更に一段の高所に立ち、皮肉は更に規模を増大して擲揄戯弄、さすが一世の驕兒も差殺されたかの編がある。「いかにどん底に陥つても、紙三枚さへあれば、生活は保証されてゐるのだ」といふ。「殿下、殿下は、この爺の宝の君貞信公の御末で入らせられますから、同じ主君と仰ぎ奉ります。少々物をお惠

み下さいまし。』と書いて出せば、少々の物は呉れさうなもの、すれば視に乗せて倉に置いたも同然、何も醜態する事はないのだ。」所で世継にも同じ計画があつて、既に女房とも談合済になつてゐるのだと、作者の傀儡二人の翁は、終に一個の蔭に陰れた作者の評言に帰一した。これが後一條天皇の條に、「世の親、一切衆生を一子の如くはぐくみおはします」と評した道長に対する國民怨嗟の声ともなつてゐるのであらう。

一世の驕兒道長をして、「この世をば我が世とぞ思ふ」と豪語せしめる爲には、無數の被治者の労働力と怨嗟と悪しき諦観と幸運が必要であつた。しかし、到るところに「道理」を強調する大鏡の作者は、これを正面切つて攻撃することはせぬ。前記引用の如くたゞこれを擲揄戯弄するに止まり、しかも擲揄は、いと氣樂げであり、抗議は、あまりに愛嬌に満ちてゐる。

二

權勢と利益の強力な擁護軍たる所謂僧兵、ことに奈良の僧兵の中で最大の暴力を振つたものは、藤原氏の氏寺興福寺（山階寺）の僧兵であつた。道長の條に、著者は左の如く言つてゐる。

いみじき非道の事も、山階寺にかゝりぬれば、またともかくも人物言はず。山階道理とつけておきつ。かゝれば、藤原氏の御有様たぐひなくめでたし。

Might is right.——山階の暴力は、正義であるから、双向ふ者が間違つてゐる。一切は甘諾せられねばならない。暴力に武裝

せられた私利私欲は、すべてを正義と化さずには措かぬ。「つけ
ておきつ」が振つてゐる。当代の人々の對藤氏の精神態度を写し
得て妙ではないか。「かゝれば」もまたよく利いてゐる。そして
藤氏は、「御有様たぐひなくめでたし」と賞讃されてゐる。なる
ほど藤原氏に取つては、いとめでたいに違ひない。めでたくない
のは藤原氏以外の者であつて、従つて「たぐひなくめでたし」
が、たとひ藤氏への皮肉であらうとも、藤氏は、若し鋭い良心の
呵責さへなければ、事實賞讃に価する強者であり、僅かに皮肉を
以て抗議するに過ぎない評者を弱者として、自己の優越感を満足
せしめるであらう。してみれば、この「たぐひなくめでたし」
は、正に額面のまゝに通用しなければならぬ。従つてたとひ藤
原氏の檢察官が之を讀んでも、評者を罰することは差控へるであ
らう。

三

周知の如く、藤氏は事ある毎に他氏を排斥し、之を政權独占の
體性に供し、その暴戻は皇族といへども敢へて假借する所がな
かつた。是等の事件に就いては、かつてや、詳説した事があるか
ら、今は重複を避けたいが、左大臣時平伝に、

右大臣（道眞）の御おぼえ（天皇の寵愛）殊の外におはし
ましたるに、左大臣（時平）安からずおぼしたるほどに、さ
るべきにやおはしけむ、右大臣の御爲によからぬ事出でき
て、昌泰四年正月二十五日、太宰権帥になし奉りて、流され
給ふ。

と、道眞左遷の動機を、作者は、一種の宿命に歸し、批判の言を
深く隠してゐる。けれども、作者は、この事件に關して決して冷
淡なのではない。正にその逆である、ことは、

第一、作者世継の話しぶりに窺はれる。彼が何か重大事件に会
ひ情熱をこめて語り出さうとする場合には、突然それまでの座談
調、對話調を變じて、演説調、独演調とする。「おはします」と
いふ言葉の頻々たる繰り返したなど、その好い例証で、こゝでは八
九行の間にそれが八個も繰りかへされてゐる。同じやうな事例
は、道長の外孫後一條天皇の條にも見え、

同じ帝王みかどと申せども（今上天皇は）、御うしろみ多かつたの
もしくおはします。御おほぢにて只今の入道殿下（道長）、
出家せさせ給へれど、世の親、一切衆生を一子の如くはぐ、
みおはします。第一の御をぢにて只今の關白左大臣（頼通）、
一天下をまつりごちておはします。

と云つた調子で、七行許りの間に七個も「おはします」がある。

このやうな例は、道長の伝における無量寿院（法成寺）の讚歎
中にも見ることが出来る。

第二に、作者は、時平の伝記を語りつゝある間に、ふと道眞の
伝記を語つてゐるやうな錯覚を起したのではないかと思はれるほ
ど、道眞の為に多くを語り、多大の同情をさへ上げてゐる。道眞の
多くの子女の悲歎、みかどの御掟のあやにくさ、左遷の途次にお
ける述懐の詩歌、謫居後の生活、北野の宮、安樂寺、道眞の祟に
よる円融朝の内裏焼亡事件にまで及び、さて立ち歸つて直ちに時
平の薨去を叙してゐるのである。

物語の分量だけではない。作者の分身である語り手世継に就いては、

まことに、おどろくしき事(天下の政治といつたやうな重大な史実)はさるものにて、かくやうの歌や、詩などをさへ、いとなだらかに故々しういひつゞけまねぶに、

と褒め、また聴き手への反響については、

見聞く人々、めもあやに、あさましく、あはれにもまもり居たり。物の故知りたる人などは、むげに近く居寄りて、外ほか見せず見聞くけしきども

と述べ、熱心なる聴衆の傾聴ぶりに煽られて、

いよくはえて物を繰り出すやうにいひつゞくるほどぞ、まことに希有なるや。繁樹涙をのびつゝ興じりたり。

といひ更に、この事実を知る為にさへげた苦心談まで持ち出して、著者が如何に強い関心をこの事件に寄せてゐるかを語りながら、左遷の動機は、只「さるべきにやおはしけむ」といふだけである。

このやうに道眞を語つた後、時平側については、時平の(三、四、)男顯忠が、戦々競々謙抑な生活態度をとつたお蔭で右大臣に昇り六十余歳まで生を保つた以外、時平の子孫は、悉く、三十、四十を過ぎずに早世し、遂には一家断絶に終る陰惨な事実を所謂火雷天神の信仰(菅公雷神信仰)の立場から巨細に語つて行くが、その原因については、「その故はたゞ事にはあらず、北野の御なげきになむあるべき。」と簡単に説明してゐるに過ぎない。大鏡の筆法は、とかくこの調子である。けれどもその応報の事象の

叙述や描写に依つて、裏面から道眞薨後の祟りを語るこれらの事実は、批判の言葉をはるかに絶して深刻に読者に迫り、運命の懲罰に戦かしめずにはおかないものがある。「理」によつてではなく、「事」によつて批判の役目を遙に効果あらしめてゐる。

四

大鏡の作者は、常に物の両面を観る。表と裏と暗と明と善と悪と美と醜と、そして是と非と——、だから決して一辺到ではあり得ない。けれども作者は、それら両面を同一場所に明示しないことがしばしばである。同一人物にしろ同一事件にしろ、彼は、或は序文に、或は天皇本紀に、或は撰関大臣の列伝に、或は雑々物語にといつた工合に、何等かの聯関を索めて之を配分し(決して漫然たる羅列ではなく)、その上で説明し叙述し描写し批判する。場合に依つては、「かやうな問題は、下藤の私が公衆の面前で口にすべきでないから差控へる」といつてをりながら、他の場所では、委曲をつくして之を暴露する事さへある。(例へば、安和の妻などに就いて、円融天皇本紀、師平伝などでは語ること回避しながら、師輔伝では事の真相を委曲に暴露してゐるやうに。) それ故、読者がそれら各所に散見する記載を漏れなく拾ひ集め、全面的に通観することを怠るならば、著者の眞意を見誤る危険があらう。

さて、今少しそれら美醜善悪の現はれてゐる例を見てゆくと、目ぼしい事件は、悉くといひたい位それである。

先づ、村上天皇の皇后安子の場合に就いて見よう。皇后は、右

大臣師輔の女、その師輔は、大鏡には一個の英雄として扱はれる。彼は、列伝中、道長に次ぐスケールの大きい人物で、「御門、東宮と申し、代々の関白摂政と申すも、多くはたゞこの九條殿(師輔)の御一筋におはしますなり。」と大鏡が言つてゐる通り、道長の榮華に磐石の礎石を据ゑた人物である。その女安子皇后は、その勢力、聖帝と謳はれた村上天皇をも凌いだと謂はれ、政權を北家一族に独占せしめる、一大素因をなした藤氏の支柱である。皇后は、寛宏仁慈、殿上人、女房、数ならぬ女官にまで深い愛憐を垂れ、兄を親の如く親しみ、弟を子の如くはぐくまれる性格で、崩御の際には、田舎世界の者まで聞きつけて惜しみ悲しんだといふ声望家であり、政治の枢機に參して、天皇の政を是正する事も少なくなかつたといはれる女流政治家であつた。

かうやうの御心おもむけのありがたくおはしませば、御祈ともなりて長く栄えおはしますにこそあべかんめれ。

と作者は讚美してゐる。しかし、「すこし御心さがなく御ものうらみせさせ給ふやうに」世間からも噂され、「御門をも常にふすべ申させ給ひ」悩ませ奉ることもあつたが、帝は、「例のことなり」と仰せられる外、何のなされるすべもない。殊に、天皇の寵妃宜羅殿の女御(子芳)に対しては、嫉妬のあまり、はしたなくも、中隔の壁に穴をあけて、土器のかけを投げつけるといふあられもない振舞をせられたといつて、作者は明暗の両面から鮮やかに皇后の御性格を描写してゐる。

そして、さすがの皇后も、嫉妬の一條だけは、思案以上の事で、激情の迸り出るあまり、かゝる行動に出られる場合もあるの

だ。「その道は心ばえにもよらぬ事にやな」と評してゐるかと思へば、その嫉妬も、場合によつては抑止され隠忍される事がある。例へば、村上天皇の御兄重明式部卿の北方で、安子皇后の妹である中君(子登)が、宮中に何か催しのある際には、姉君の招きによつて忍んで參内せられるのであるが、ある日、村上天皇が、ちらと御覽になつたところ、あまり美人であつた為に、元来好色の天皇は、「朕は登子をかやうに思ふ」とむやみに安子を買めたてられるので、詮なく安子も、一二度は知らぬ顔して、御見逃し申した。その後、帝は、深く登子を恋慕せられたけれども、人妻たる登子をさう度々とは思はれて、遂に登子の參内を禁止せられた。天皇の寵愛關係に就いては、他人の場合でも仮借する事の出来ない御性格であるから、ましてこの場合は、一入不快に思はれたであらうが、由来肉親愛に富まれた皇后は、この邪恋を騒ぎ立て、妹の外聞にも関し、延いては、どんな不祥事が發生するかも知れぬと「あたたりを広うかへり見給ふ心の深さ」から、「なだらかに色にも出でず過ぐさせ給ひけるこそ、いとかたじけなうかなしき事なれな」と、切ない皇后の御心境に満腔の同情をさしげ、皇后の嫉妬にもなほ裏のあることを叙べてゐる。さて後、皇后も、登子の夫重明親王も「失せさせ給ひて」後は、天皇は、公然と登子を參内せしめ、貞観殿の侍と申してあながちに寵愛せられ、他の女御、御息所達が、「そねみ給ひしかど、かひなかりけり」と、今度は、村上天皇のあながちな御非行を暴露(尤も、日本紀略には、登子の侍となつ)、更に、これについ

ても、「九條殿(安子の)の御幸とぞ人申しける」と、立ち帰つて師輔の幸運を説き、立場をかへれば、すべては、明暗の表裏をもつことを知らしめる。

五

その師輔に就いても、百鬼夜行に遭遇した話、民部卿元方(南家)の系雙六をうつつて相手を威圧し懼伏した話、左右の足を東西の大宮にひろげて内裏を抱いて立つたといふ夢の話など、豪放、瀾達な彼の性格は、躍如として描かれてゐるが、元方の靈が彼の子孫にまで祟つた話や、内裏抱擁の夢も、生ざかしい女房の「いかに、御股痛うおはしつらむ」と冷かした為、吉相の夢も夢判断の仕方が悪かつた為、その人物の偉大に拘らず撰政関白となり得ず、又、曾孫伊周の不遇に終つたのもその為だらうと、けちをつけてゐる。

公季の伝には、師輔が、女房を賺して、村上天皇の皇妹康子内親王に密通して、天機を損じ、兄実頼からは「お前のきたなきに」と諷されたことを暴露してゐる。さうかと思ふと、師輔が勅許を得て、康子を妻としてからは、夫婦愛の濃やかであつたと、康子の薨後は一生独身生活を續けて、「又二つこと人見るべきにも侍らず」と生前に誓つた言葉を文字通りに実行したことを細々と述べ、二人の仲に生れた公季は、「世の常ならぬ」一族思ひの安子皇后に養育せられて、宮中に生活し、村上天皇も亦ひどく寵愛せられて、何事も皇子達と同様に待遇せられたと光明面を

述べるかと思へば、直ぐに續いて、兄皇子(義理の兄)は、「彼は親王方を自分と同じ兄弟と思つてゐるのだらうか」と「うめかせ給ひける。」といつて、その非難を述べてゐる。まるで明暗表裏の交錯連鎖ではなからうか。

古今を通じて無類の繁栄を誇つた師輔にも、「只一つ外孫冷泉院の御不例(狂氣)だけは、まことに遺憾な暗翳である」と世継が云ふと、青侍は、「それでも世間では何かといへばまづ冷泉院の御代の事を持ち出して先例とするではありませんか」と反駁する。世継は言下にそれを肯定し、「勿論です。さうなくてはなりません。この帝がこの世に御出現なされたればこそ、『永くこの藤氏の殿ばら今に榮えおはしませ。』若しさうでなかつたならば、今頃は我等も僅かに撰関大臣に祇候する五位六位ぐらゐに成り上つて、所々の前駆や雑役にこきつかはれてゐたであらう」と道長公(師輔の孫)も仰せられるのです」と師輔の一派が榮華の頂点を極め得た好運を述べてゐる。まことに当代の日本歴史は、貴族の歴史、貴族の歴史は、藤氏北家の歴史であるかの觀を呈したその公私混淆の政所政治も、冷泉円融と安子皇后が次々に御産みになつたればこそであるが、「世の表ふることもその御代よりなり」と囁んで吐き出すやうに著者が云ふ通り、撰関榮華時代は、すでに公家時代の衰微期に入つたことを告げてゐる。

六

師輔の弟師尹の外孫敦明親王の東宮退位の大事件は、師尹の甥

道長等の陰謀による事件で、それは、伊尹伝の中に表裏両面を尽して詳記されてゐる。道長等は、親王自ら進んで退位の決心をかためられたかのやうに擬装する為に、又決行を促す為に、如何に巧妙な策謀と老獪な手段を用いたか、親王の母后（城子）の驚愕悲歎、事件関係の人々の人物、性格、表裏両面の行動、心理の分析、その世人への反響等の描写と叙述は、之を短篇小説として見ても、大鏡中出色の文字で、極めて人生的意義の深い一章であると思はれるが、かつて述べたこともあるから、今は割愛する。

更に重大なのは、花山天皇の御出家である。一体大鏡では、天皇の本紀は、多く歴代の御略伝を六国史式に（今日の履歴）列記してゐるに過ぎないのであるが、花山天皇の條は極めて微妙な人間心理の動きまでも描写されてゐて、叙事の体裁が他の天皇本紀とは、甚だ不釣合にさへ感じられる。

言ふまでもなくこの事件は、兼家が早く外孫一條天皇を立て、摂政となつて威福をほしいまゝにしようとする陰謀によるもので、寛和元年天皇の寵姫恆子が、御産の為に卒去し、哀悼の余り天皇が世をはかなんで居られたのに乗じ、その子道兼をして決行せしめたものである。

寛和二年六月二十三日の夜の有明月が、藤壺の上の御局から出られた帝の頭上を皎々と照らす。「顯証にこそありけれ、いかゞすべからん」と、無心の月光が帝の御心を躊躇せしめる。いかに覺悟を堅めたとはいへ、御歳は十九、当代の優雅な宮中生活や天皇の御性格から見ていかにもと察せられる。それに対して道兼は、「さりとして止らせ給ふべきやう侍らず。神璽宝劔わたり給ひ

ぬるには」とあわて、決行を促がしたのは、出御以前に既に自分の手で三種の神器を東宮の御方に渡して了つた後であるから、殿内に帰参せられることはもはや不可能な事と思つてさう申したのだといふ。さやかなる月の光をまばゆい、（面はづかしい）と帝が思召される瞬間、月の面に群雲がかゝつて少し暗がつて行く。「よし、朕が出家は成就するのだ」、張りつめた至純な心が一進して二三步歩み出でられるとたん、電光の如く閃いたものは、寵妃故弘徽殿の女御の御文である。これこそは、日頃破り残して目も放たず故人を偲んだ宝である。「ちよつと」と言つて取りに歸られた時である。道兼が、「なぜそのやうな未練なお心になられたのです。この機を外しては、どんな障害が出て参るかも知れませんの」と「そら泣きし給ひけるは。今度は言葉だけでは追つつかない。畢世の技量をふるつて空泣きした彼の悪疎ぶりを見よ。（中略）さて花山寺に着御あつて御剃髪が完了すると、道兼は、「私は、ちよつと退出致しまして、父大臣にも変らぬ姿を今一目見せ、出家の事情も申した上で、必ず又歸つて参りませう」、「ぢやお前は朕をだましたのだ」と泣かせられた。

あはれに悲しき事なりな。日頃かく御弟子にて侍らばむと、契り賺し申し給ひけむが恐しきよ。

と著者は彼の陰險さを評し、又、父兼家は、もし道兼が義理につきまり、人情に動き、周囲の事情に迫られて、眞実出家でもすれば大事と、「さるべくおとなしき人々、何がしかがしといふ源氏の武者達」を警護に付け添へた。彼等は、京の町中は姿を聞まし、鴨河堤のあたりから憚ることなく身をうちさらけて御供をし

た。寺などで若し強引に道兼の頭を剃り落すことがあつてはと、一尺許りの刀の鯉口をくつろげて守護し奉つたといふ。」と、武力を行使して伴の出家を防禦したことを物語つてゐる。

かつて藤村博士が、大鏡の批判は、美的批判であり、感情批判である。国民思想上飽くまでもその罪を囁らすべきこの大事件も、著者の評語は、たゞ「あはれ」といひ、「かなし」といひ、「おそろし」といふに過ぎぬと謂はれた。美が一切に君臨し、主情主義が、文化の支配的基調であつた当代にあつては、敢て怪しむに足りない現象である。

「けれども評語は正にかくあらうとも、著者の眼は涙に曇つて理非曲直正邪善惡の弁別が附かないのではない。その感情語の中に、正邪善惡の批判がこめられ、又、場合によつては、たとひ一個の評語が挿まれずとも、よく抉剔すべきは抉剔し、暴露すべきは暴露して、その非を責めてゐるのではないか。只六國史の如く、儒教的用語を以て批判し、概念的知識や学問的理解を以て人間を律する事が尠いことは確かである。この点が、また大鏡の六國史に一步を進めてゐる点で、人間理解が遙かに深く、作中の人物が生氣を帯び現実味を含み、今もなほ人生的意義を感じ得る所以であらう。」と書いたことがある。今も大体さう思つてゐる。とにかく、前述兼家道兼等の云為行動の描写叙述の中に倫理的非難が含まれてゐないとは、一寸考へ難いのはあるまいか。

七

道兼の伝は、彼が関白の宣旨を蒙るや否僅か七日にして薨じ、七日関白と渾名せられた記事を以て始められる。「又あらじかし、夢のやうにてやみ給へるは」と世継がいふ。いゝ氣味だと思つて読む読者は、記載事実の中に倫理的非難を下してゐるのであり、この前後、道隆、伊周、道兼、道長と政權がめまぐるしく表裏転変する運命の激しさ人間のあさましさをのゝく読者は、宗教的な、或は哲學的な人生の意味を讀みとりもしよう。世継の物語は、直ちに続いて、道兼が方違先である出雲守相如の家で関白の宣旨を承つた時の喜を述べ、それから御礼言上の為に参内する前驅の美々しさ、北の方の本邸に帰る供人の騒がしさ、掃邸後の殿内の賑かさ、人々の喜ばしさ「たゞ思しやれ。」(表)あまりな騒ぎと眉をひそめる人もあつた。(裏)と著者は述べてゐる。

参内の時道兼は、一寸気分が変だとは感じたが、なに大した事もあるまい。拜賀中止は縁起でもないと我慢して参内したが、急にひどく苦しくなつたので、正式に殿上の間からの退出も叶はず、御湯殿の馬道の戸口に前驅を召し、その肩にすがつて、「御冠もしどけなくなり、御紐押しかけていといみじう苦しげにて」車から下りるのを見た近親達の心持は、まあどうだつたらう、出た時の心持に比べ。しかし又「よもや」と思ひ直して、「さゞめきにこそさゞめけ。胸はふたがりながら、ここちよがほをつくり合へり」と書き、だからこの事に就いては、大した評判にもならなかつたと、筆は簡單ながら、人々の行動、心理の動きを生々と描き出す。こゝは表も裏もない。只あるがまゝである。

次の描写は、一段と光つてゐる。祝賀の為に來訪した右大臣実

資に、危篤に迫つた身とも知らず応接する場面である。母屋の簾越しに臥せつたまゝ、対面しながら、一からだの調子がよろしくなくて急には出られませんから、かやうな様で御話申しあげます。この年頃何かにつけて貴下の御芳志のほど心中深く感謝致して居りながら、これといふ事のない中は、その都度御礼も申しあげずに過ぎましたが、今はこの身分(白鬮)になりましたから、公私とも御恩返しが出来ようかと存じます。これからは、大小何くれと御相談申しあげようかと存じますので、失礼をも顧みずこんな取乱した所へ御案内申しあげたのです。」と細々(こまごま)仰せられるやうだが、只あて推量でこんなことだらうと聞き做すばかり、「御息ざしなどいとお苦しげなるを、いと不便なるわざかなと思ひしに、風の御簾を吹きあげたりし間(はざま)より見入れしかば、さばかりの重き病をうけ給ひてければ、いかでか(ドウシ)御色もたがひて、きららかにおはする人ともおぼえず、殊の外に不覚になり給ひにけりと見えながら(御本人ハ)長かるべき事どものたまひしなむあはれなりし」と実資公は、後に語られたといふ。身に迫る運命の予感もなく、樂しく頼もしげに将来を誓ふあたり、彼の善良な一面を実資と共に同情ある筆致で描出してゐる。(表)

さうかと思ふと直ぐに續けて、道兼の長男福足の我儘な挙動、蛇を領じた祟りで頭に腫物を出して夭折した話、三男兼綱の藏人頭を取上げられた話をのせ、道兼は、花山天皇をだまし、二男兼隆は、少一條院を賺し、この一族は、帝東宮の御側に近づくべからざる物騒な人間でもあるから、側近の重職藏人頭を取り上げられたのも至当な事だと難詰してゐる。が併しその表現は、「帝

東宮の御あたり近づかでありぬべき御族(ごう)といふ事の出で来にしぞかし。いと希有に侍りきな」と極めて隱約である。(裏)

更に道兼の女(むすめ)の伝に及び、この粟田殿(道兼)の子孫は、意外につまらなかつた。それは、お心が甚だ薄情で恐しく、人からはひどくおぢられた殿であつたから、不思議にも一族が断絶したのであると正面きつて非難し、又此の殿は、父大臣(兼家)の御忌日には、喪にも籠らず、暑さにかこつけて御簾も高々と揚げ、念誦どころか、然るべき人々を呼び集め、古今後撰をひろげ「興言し遊びて、つゆなげかせ給はざりけり。」その訳は、「花山院は私がだましてお下(おろ)したのだ。だから関白も私に譲らるべきであるといふ御恨」、死んだ父への抗議の爲であつた。実に常軌を逸した話ではないかといつてゐる。(裏)

八

花山院については、その母后が、伊尹の第一の御女である縁故を辿つて、伊尹伝に、毀誉褒貶両面から数々の逸話を述べる。

天皇を世間では「内劣りの外めでた」と評したといふ所から語り始め、冬の臨時祭の当日朝餉の中院で、殿上人を馬に乗せて興ぜられるのを、あさましいと人々が見てゐると、果ては御躬らもお乗りにならうとする。それを外祖父義懐中納言が、然るべく取り做して院の御恥を掩うて差上げた話、今日の我々にはさほどにも感じられないこの御行為も、当代貴族の生活気分には甚だにが／＼しい事件であつたと見え、一体、院は、表には見えないが、

どうも御性質が変で、「これは容易ならぬ事です。だから源民部卿も、冷泉院の狂ひよりも、花山院の狂ひの方が始末が悪いと仰せられたのである。」(貶)といふ。

院は、御出家の本意を堅持せられて、日本国中修行せられぬ処もなく、熊野の千里ノ浜では石を枕に大殿ごもられた事さへある。かうする中に験徳を積まれ、叡山に登られた際、僧達(せんくわ)が験競(けんきやう)べをして居たので、自分も試さうと祈念を凝されると、護法の憑いた法師が、院のお側の屏風にびたと引きつけられて身動きも出来なくなつた。余り久しくなるので、もうよからうと法をお解きになると、その寄呪(よまじ)の法師は、躍り上つて駆け出したので、人々は院の法力に感歎(かんたん)の声を放つた。「験力も人柄によること、如何に修業の積んだ人も、どうして院に及ぶ事が出来よう。前世の威力に依つて国王の尊貴に生れ、その又王位を一擲しての出家の御功德、無量無辺なものも当然の事である(褒)。これほどまで靈験あらたかなる院が、末永く御懈怠あるべき筈もない。それにあの時々の御乱心は！(貶)。これ全く冷泉院(君父)の系統に祟る物怪のなす業(わざ)であらう。」と評して、話は、冷泉院南院焼亡の際における冷泉、花山御父子の御崎行に及ぶ。花山院は御馬で、頂に鏡をはめた御笠を阿彌陀に被り、「冷泉院はどこに入らつしやるか」と、人毎に尋ね、父の院に探り当つては御馬を下り、鞭に着いた腕貫に御腕をさし入れながら御袖を前に掻き合せて恭々しく跪つかれた有様の異様さ、まづ余り見られない光景であつた。おまけに御父冷泉院がこの動乱のさ中に、神樂歌の庭燎(にほひ)を声高らかに歌ひ出されたので、高階明順が、「庭燎が猛烈だね」と言つたの

で、万人こらへ切れずどつと一度に噴きだした(貶)と。次の崎行は、花山院が賀茂祭の還り立ちを御覽になつた時の事、前日(祭の日)、院の徒僧等が、公任齊信等の車に乱暴を働いた翌日の事だから、院も殊更御幸など慎まるべき筈なのに、かのすばらしい豪の者で、院の第一の昵近なる高帽の頼勢を始め悪僧どもが、御車の後に群れ従うた業々しき。何よりの壯観は、院の御珠数であつた。小さい柑子(かんじ)を普通の珠として紐に通し、大柑子を親珠としたのを長々と指貫の袴と共に御簾の外にお出しになつた奇観、左様な見物は一寸類が無い。そこへ檢非違使が来て、昨日の悪僧どもを逮捕するといふ騒ぎが起つた。そこで權大納言行成が、「早く御還御遊ばせ、大変です」と申しあげると、徒僧どもは蜘蛛の子を風の吹き払ふ如く飛び散つて、只車副だけで、院は、他の物見車の後について御還り遊ばしたのは、さすがにお氣の毒でもあり、又勿体なくも感じられた。さて檢非違使配下の役人に、ひどく厳しい訊問を受けさせられ、永く太上天皇の御名を汚がされました。(貶)と嘆息する。

こゝで又一転して作者は、院の芸術的天才を讚美する。先づ和歌の御才能の秀拔なこと、花山院御集における御孝心のあはれさ、建築における劃期的な御設計、工芸美術における無類の新意匠、自然美に対する豊かな鋭い鑑賞力、絵画における独創性等、作者は極めて具体的に、而も要領よくその焦点を捉へつゝ、今日の我々にも深く共感を起させるやうに描いてゆく(褒)。飛んで道隆の伝には、褒貶半ばする語り口で、院と隆家の競技的鬭争の光景をのべる。

このやうに、大鏡中の目ぼしい人物事件は、殆どといはれるほどに、陰陽両面から説明され叙述され描写され暗示されてゐるが、それは大鏡の文芸性を論ずる際に譲つて、今は一切を省略に附しよう。

九

さて大鏡は、本論冒頭に述べたやうに道長の栄華に批判を下した後、また、無量寿院供養の日における道長一族参詣の盛観を描いて、豪華絢爛目を奪はしめるものがあるが、直に続けて次のやうにいふ。

かやうの事どもを見給ふるまゝには、いとどこの世の栄華御栄えのみおぼえて、染着の心のいとどますます／＼に起りつゝ、道心つくべうも侍らぬに、河内ノ國そこ／＼に住む何がしの聖は、庵より出づる事もせられねど、後世の責めを思へばとて、上り参らせたりけるに、關白殿(道長ノ子)の参らせ給ひて、雑人ども拂ひ罵るに、これこそは一の人におはすめれと見奉るに、入道殿(道長)の御前にみさせ給へば、なほ(道長)まさらせ給ふなりけりと見奉るほどに、又(後一條)行幸なりて、乱声し待ちうけ奉らせ給ふさま、御輿の入れせ給ふほどなど、見奉りつる殿たちの畏り申させ給へば、なほ國王こそ日本第一の事なりけれと思ふに、(ソノ天)下りおはしませ給ひて、阿彌陀堂の中尊の御前につき居させ給ひて拜み申させ給ひしに、「なほ／＼、佛こそ上なくはおはしましたしけれと、この會の庭にかしこ結縁申して、道心なむいと熟し侍りぬ

る」とこそ申され侍りしか。

此は事実を以てする一種の栄華否定論ではなからうか。口を極めて讃頌し來つた栄華に対し、こゝに一転語を下して、彼等の誇示する栄華も権勢もすべて此岸的な一切は、阿彌陀の前には空にひとしいと述べようとする如くである。(代を重ねるに従うて豪華華麗の度を加へ道長に至つて遂に絶頂に達した藤原氏の寺院建立は、信仰の為ではなく、現世享樂の為である。寺院は別荘と化し道長の如きは無量寿院を病室となし、そこに臨終を告げたのである。)道長の栄華の蔭には夥しい人間の犠牲があり、犠牲を犠牲とも感じない民衆の悲惨なる光榮があつた。作者はそれを一種独自の方法を以て難詰してゐる事は既に冒頭に述べた。今又一介の田舎世界の聖を点出して、誇るに足らぬ栄華を誇る愚かな無意味さを暗示してゐる。道長の栄華も、その墓前二年即ちこの大鏡の語られる万寿二年を頂点としてあわたゞしく転落する。作者も直ぐその後、

さて今年(万壽二年)こそは、天変しきりにし、世の妖言などよからず聞え侍るめれ。かんの殿(道長の女嬉子)のかく懷妊せしめ給ひ、院の女御殿(道長の女寛子)の常の悩の中にも今年となりては、ひまなくおはしますなるなどこそ恐しううけたまはれ。

といつて、道長の栄華に早くも陰翳のさし來つたことを暗示してゐる。

然らば作者は、栄華を否定し、欣求淨土に安住の境を求めようとするのか。さうではない。これは自明といつてもよい位で、改めて論究する必要もなからう。新時代の黎明を告げる惠心僧都の

往生要集は、すでに花山天皇の寛和元年に成り、大鏡にも僧都の頭陀行には触れてゐるが、作者を篤信の仏教信者と考へることは出来まい。さるがう魂ゆたかな樂天的な現世的な潤達な作者、榮華を語るにあのやうな情熱を見せ、一再となく道心の薄い自己を告白し、宗教を美の隷屬者と考へてゐるらしい作者(義孝の條その他)に、切実な現世否定や、深刻な厭世観などあらうとは思へない。彼はまだ新時代の児ではない。仏教に理解は持つてゐても、信仰としてのそれではなく、知慧としてのそれである。それならば、彼の榮華観は、本当のところ何なのか。彼は榮華を讚美する。又否定する。その何れでもあり、又何れでもない。矛盾の綜合である。彼には事象の表裏長短が直ちに目に映じるからである。又頗る人間的である為でもある。彼には、ある既成の小さな枠をはめて人生を律しようとするやうな臭味がない。もつと博く自由にその心が開いてゐる。

かうした心——世継の自讚する地金の牙えたその心の鏡に映つた人間乃至人生の種々相を、明暗表裏に亘つて公正に語り生かすのが、大鏡の目的であらう。殊に注意すべきは、「世継はいと恐しき翁に侍り。眞実の心おはせむ人は、なかはづかしとおぼさざらむ。」といふ翁の言である。「眞実」とは、單なる偶然的な一面的な個々の断片的な史的な事象を指すのではない。事象の中に、事象の奥に、或は事象の前後左右に構造聯関を保ちつゝ働い

てゐるより恒常的な必然的な普遍的な或る物であり、従つて又權威ある或る物である。この「眞実」の權威の前にひれ伏すものにして、始めて、世継を恐しき翁と感じ得よう。良心の嘔きに素直に耳傾ける者ならば、慚愧に居たゞまれないであらう。阿謏と奸佞、小策と術数、享樂と頹廢、骨肉の相剋に生きた大鏡中の人物等はどうか知らない。けれども、菩提講の聽衆、大鏡の讀者にして、眞に「眞実」の權威を認めるならば、翁の物語が「大鏡」と讚へられ、翁の姓名が「大宅(公)の世継」と名告られるのも、ふさはしいであらう。但しそれは、著者の眞実性を全幅的に信頼しての話であつて、私にその勇氣があるといふのではない。只作者が、この線に沿つてこの本を書いたことだけを謂へばいゝのである。

かうして大鏡の主題は、その中心として道長の榮華を、讚美ではなく讚否両面から述べ、藤氏の歴史、莊園貴族の生活史を辿り、併せてその源流に溯り、又將來を暗示するにある。そして、二三の例外を除けば、大鏡全体は、雜々物語をこめて一個の構造聯関をなしてゐると見るべきであり、それは結局作者の分身繁樹が、「あきらけき鏡にあへば過ぎにしも今行末のことも見えけり」と世継を讚美した歌の中に端的に表現された著者の抱負を實踐しようとしたものと観るべきではなからうか。